

# 高校古典（漢文）教材のレトリックに着目した 教材研究の実際とそれを用いた発問の構想

前田 康晴

Focusing on the rhetoric of highschool classical (Chinese literature) teaching materials:  
the practice of material research and the conception of questions using them

MAEDA Yasuharu

## 要約

日本学術会議（古典文化と言語分科会）は令和2年に「高校国語教育の改善に向けて」という提言を行った。その中で、高校古典（漢文）については「表現の工夫」の扱いが少ないという指摘がなされた。そこで、本稿では、この課題の改善のために、高校古典（漢文）教材のレトリックに着目した教材研究とそれを用いた発問を構想するという論を展開することとした。この論の中で、読み解きの実際に使用した教材は、Ⅰでは『孟子』（性善説）教材。ここでは、「共感」を得るためのレトリック。「由是観之」に込められた「拡充」のレトリックなどを読み解いた。Ⅱでは、『韓非子』（二柄説）教材。ここでは「興味・関心」のレトリック—冒頭文—・「繰り返し」のレトリックなどを読み解いた。どちらの教材も、「主張」（＝結論）をよりよく「説得」（よりよい伝達や理解）するためにレトリックが用いられたという新しい視点からの読み解きである。

キーワード：レトリック、「主張」（＝結論）、「説得」、「共感」

## 1 始めに—高校国語科古典（漢文）の 問題点の把握—

「提言 高校国語教育の改善に向けて 令和2年（2020年）6月30日 日本学術会議 言語・文学委員会古典文化と言語分科会」は、高校国語科（古典漢文）の課題を次のように指摘する。「本分科会は、この新指導要領の意義を認めつつも、そこにはいくつか重大な問題が含まれていると判断し、議論を重ねた。…（前略）…2 提言の背景（1）新指導要領の告示『解説』の冒頭「第2節 国語科改訂の趣旨及び要点」の中で引用されている

2016年（平成28年）12月の中央教育審議会答申は、高等学校の国語科の課題を次のように指摘していた。○高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。ここで求められている、生徒の主体的な言語

活動を重視し、そのために語彙を豊かにし、古典の学習意欲を高めるべきという指針については、正当なものと認められる。ただし新指導要領がこの要望に十分応えているかといえ、懐疑的にならざるをえない。」と。確かに、これらの指摘は正しい。特に、筆者がこの提言の中で重要視した指摘（傍線による指摘は筆者による）は、以下の3点である。①高校古典（漢文）の授業ではまだ講義調の伝達型授業に偏っているということ。②①のためか、グループワーク（アクティブラーニング）の授業がほとんどなされていないということ。③高校古典（漢文）教材で「表現の工夫」（以下、レトリックとする）についての教材研究が少ないということ。当然、それは、レトリックについての発問も少ないということになる。

そこで、本稿では③の課題改善のために、高校古典（漢文）教材のレトリック（＝「表現の工夫」）に着目した教材研究（レトリックを読み解く）の実際とそれを用いた発問を構想するという論を展開することとした。これによって、③の課題が少しでも改善の方向に向かうことを期待するものである。

## 2 具体的な教材 I

### （1）性善説—『孟子』思想教材本文

#### 【本文】

孟子曰、「人皆有不忍人之心。先王有不忍人之心、斯有不忍人之政矣。以不忍人之心、行不忍人之政、治天下、可运之掌上。所以谓人皆有不忍人之心者、今人乍见孺子将入於井、皆有怵惕惻隐之心。非所以内交於孺子之父母也。非所以要誉於乡党朋友也。非恶其声而然也。由是观之、无惻隐之心、非人也。无羞恶之心、非人也。无辞让之心、非人也。无是非之心、非人也。惻隐之心、仁之端也。羞恶之心、义之端也。辞让之心、礼之

端也。是非之心、智之端也。人之有是四端也、犹其有四体也。」（『新釈漢文大系 孟子』内野熊一郎 明治書院による。旧字を新字に訂正。筆者による）

#### 【書き下し文】

孟子曰はく、「人皆人に忍びざるの心有り。先王人に忍びざるの心有りて、斯に人に忍びざるの政有り。人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行はば、天下を治むること、之を掌上に運らすべし。人皆人に忍びざるの心有りと謂ふ所以の者は、今人乍ち孺子の将に井に入らんとするを見れば、皆怵惕惻隱の心有り。交はりを孺子の父母に内るる所以に非ざるなり。誉れを郷党朋友に要むる所以に非ざるなり。其の声を悪んで然るに非ざるなり。是に由りて之を觀れば、惻隱の心無きは、人に非ざるなり。羞惡の心無きは、人に非ざるなり。辞讓の心無きは、人に非ざるなり。是非の心無きは、人に非ざるなり。惻隱の心は、仁の端なり。羞惡の心は、義の端なり。辞讓の心は、礼の端なり。是非の心は、智の端なり。人の是の四端有るや、猶ほ其の四体有るがごときなり。」と。

### （2）『孟子』（性善説）教材のレトリックを読み解く際の基本的な視点

洋の東西・時代の新旧を問わず、思想家は自己の「主張」（＝結論）を効果的に分かりやすく伝え、同時にそれに対する「同意・共感」を得ようと、その会話に文章に多彩なレトリックを用いて豊かな表現を工夫し相手を「説得」する。このことから、漢文の教材研究においても、その思想家の「主張」（＝結論）や表現技法などを確実に理解することが教材研究に必要な方法論の一つになるのである。

「説得」効果を計算して作られた文章をレトリック面のみに限定して読み解くことについて、もう少し詳述するなら、広島大学教育学研究科助教授 柳沢浩哉は次のように指摘する。「修辞学的分析（rhetorical analysis）とは、レトリックの蓄積を利用してテキストを分析する方法である。ただし、この方法の最大の特徴はその分析方法ではなく分析の目的にある。テキスト分析のほとんど

がその目的を理解過程の解明に置いているのに対して、修辞学的分析では表現効果あるいは説得効果の解明を目的とする。これはレトリックが効果的な表現、説得力のある表現の作成を課題としていたことから必然的に導かれる目的であり、特に説得効果を計算して作られた文章の分析に有効である。言うまでもなくレトリックはヨーロッパ諸語を前提として開発された技術体系であるが、レトリックが主な研究対象を言語の発想レベルに置いていたため、そこでの蓄積には言語を越えた普遍性がある。」（『お吉殺しの場』『女殺瀧地獄』）の修辞学的分析—説得力をコントロールする修辞技法—。傍線の指摘は筆者による）とする。つまり、修辞学的分析とは、文章が「どう説得するか」を詳細に調べ、どのように言葉を使って効果的にどう伝えるか、ということが重要だということである。この指摘は正しい。レトリックの読み解きには、この視点を根底に据えることになる。

さて、具体的な教材として、高校漢文に頻出する『孟子』（性善説）教材を選択した。その理由は、この教材文章には多くのレトリックが使用されているからである。（（3）孟子の魅力—説得の弁論術—に詳述した。）

さらに、『孟子』のレトリックの読み解きの視点として、「主張」「（＝結論）の「説得」という視点を加え、一文一文を丁寧に吟味した。それは、『孟子』教材の文章が「主張」（＝結論）の「説得」効果を計算して作られた文章だからである。

言うまでもないが、孟子は諸国を遊説し、自己の「主張」（＝結論）を説いて回った。そのため、『孟子』本文は、その遊説のさまざまな場面で、孟子が多彩な話術を用いて自己の「主張」（＝結論）を人々（王侯・貴族などの為政者階級。または弟子）に理解・納得させ、「共感」を得ようとした文章ということになる。

以上より、教師にとって、「説得」のレトリックという視点の教材研究は、次のような利点がある。①孟子の意図した効果的な伝達表現（レトリック）とその工夫を知ることができる。②①によってその「主張」（＝結論）への劇的なアプロー

チができる。③レトリックによって新しい視点や新しい教材理解などの「発見」に繋がることができる。また、④授業実践面においては、生徒にレトリックを意識させることによって漢字一字一字、丁寧に読むという態度を身に付けさせることができるなど。

なお、ここでのレトリックの読み解きについては、以前、『1991年第181号漢文教室「繰り返しの語に着目した漢文の読解」』や『1995年第185号漢文教室「共感を得るための『孟子』のレトリックについて」』などで論じたが、そこでは「なぜ、レトリックを用いたのか」「どのような目的のためにレトリックを用いたのか」という問いに答えていなかった。そこで本稿は、その点に十分に応えられるようレトリックを読み解いた。その視点は、「主張」（＝結論）のよりよい「説得」のためにレトリックがあるということである。

これより、本稿は新しい視点に基づいた読み解きの論文になっていることをここに記す。

### （3）孟子の魅力—説得の弁論術—

佐野大介は、次のように（傍線による指摘は筆者による）『孟子』の魅力解説する。「儒教『孔孟の道』とも呼ばれ、また孟子には『亜聖』という呼び名があります。（中略）『孟子』の魅力はどこにあるのでしょうか。まず第一はその思想性です。性善説・四端説といった人間論や、王道論・井田制といった政治論、また各所に現れた歴史観など、『孟子』に説かれる哲学・思想は人々を魅了してやみません。次に、その文章の弁論としての面白さが挙げられます。『孟子』の各章は、多く諸侯との対話や他の思想家との議論で構成されています。孟子がその巧みな弁論術で鮮やかに相手をやり込め納得させる様子は、読んでいて爽快感を覚えるものです。さらに孟子は、道徳が荒廃し各国の争いが絶えず、民が窮乏する当時の社会を、なんとかして民衆が安心して暮せる社会へと変革することを強く希求していました。『孟子』を読むと、その思いが全篇にわたって溢れているのが感じられます。この孟子の「思い」もまた、『孟子』の大きな魅力だといえるでしょう。本書には、思想的に重要な章・現代的意義の大きい



章・内容の興味深い章・弁論の優れた章など、五十一章を選んで収録してあります。」(『孟子 ビギナーズ・クラシックス 中国の古典・はじめ』角川書店)と。ここでも孟子の弁論術の鮮やかさが魅力として理解されている。(筆者は「説得」のレトリックとした。)この視点はやはり教材研究や発問の構想にはさらに必要な視点だと考えられる。

付け加えるなら、孟子の弁論術は、自己の「主張」(＝結論)を「説得」するためのレトリックであることを忘れてはならない。

#### (4)「孟子」教材のレトリックの読み解き

##### ①「意外性の提示」を用いたレトリック

一人皆有不忍人之心―

孟子はまず、「人皆有不忍人之心」(人は誰でも人に忍びざるの心を共有している)と提唱する。孟子は、この「人皆有不忍人之心」という言葉を、孔子のいう「仁」が私たちに存在する根拠となる概念を表現する言葉とした。孟子の独自の人間観を表現する言葉であるため、それまでの思想家も・遊説家も、誰も使用したものはいない。

だから、ここは孟子の言説を聞いている弟子(聞き手・読み手。この教材の場面は、孟子が弟子である公孫丑に語ったと理解したため弟子とした)は、開口一番、今まで聞いたことのない意味不明の「意外な言葉」が投げかけられたということになる。すると、弟子(聞き手・読み手)は「その言葉の意味は何であろう。」「何だかわからないが面白そうだ。」と、心を揺り動かされてしまう。つまり、「意外性の提示」を用いたレトリックによって、その「意外性」に引き込まれてしまうのだ。そうになると、弟子(聞き手・読み手)はその内容を知るために、それ以降の言葉に注意を払うことになる。最初にハッとするような言葉を投げかけ、弟子(聞き手・読み手)の心をギュッと掴み、弟子(聞き手・読み手)をこちらに引き込めば、それ以後の「説得」はまさに掌の上でものを転がすようなものである。

ただし、ここで注意しなければいけないのは、孟子は単なる意味のない虚偽威しとしてこの言葉を使用したのではないということである。先程も述べたが、これは孟子の人間に対する深い洞察か

ら生まれた「発見」(新しい認識・新しい概念)を述べた言葉(自己の「主張」(＝結論)なのである。これによって、弟子・聞き手・読み手)は「人皆有不忍人之心」という新しい言葉を「発見」し、新しい認識・新しい概念を手に入れ、孟子の「主張」(＝結論)をよりよく理解することになるのである。この新しい言葉の「発見」はレトリックの読み解きの大きな働きの一つであることもここに指摘しておく。

「意外性の提示」については、橋本堯は、「ここに『孟子』は『人に忍びざる』ということばをくりかえし用いたが、これは彼一流の勇弁術であって、ことばとしてやや耳慣れぬ表現を取りつつ、『それは何のことだろう?』と聞き手の注意をひきつけるのである。」(『漢文・読み方と鑑賞』日中出版)と読み解く。この傍線部(傍線による指摘は筆者による)の指摘は正しい。

##### 発問の構想

○「不忍人之心」という言葉の意味を辞書やネットで調べてみましょう。

○孟子以前の人には使わなかった言葉「不忍人之心」を、孟子は開口一番、話します。あなた方は、「意外性」のある言葉を突然言われたどう思いますか。グループで話し合い、発表してみましょう。

○「意外性」のある言葉を突然言われた時のその思いを参考に、なぜ孟子がこのような言葉を開口一番、話したか。孟子のねらいをレトリックの面から、グループで話し合い、発表してみましょう。

##### ②「皆」に表現される「同調」効果のレトリック

一人皆有不忍人之心―

「皆」という何気ない言葉にも注意する必要がある。孟子が、「皆＝私もあなたも同じように」という言葉を用いたのは、あなたも私も「人に忍びざるの心」を共有した人間であるという「同調」効果を意識したものと読み解ける。もう少しいうなら、「皆」によって弟子(聞き手・読み手)に仲間意識を持たせるとともに「同調」によって心を開かせ、話題の中に引き込む。孟子の「主張」(＝結論)である「人皆有不忍人之心」をよりよ

く意識させることになるのである。他人と同じでいたいという、人間の「同調」原理願望を刺激し、心を開かせる見事な一言でもある。

「皆」の使用は、この箇所一回だけだが、その漢字の持つ意味や用法を丁寧に吟味していくと、レトリックの働きという「発見」に出会うことになるのである。

#### 発問の構想

○孟子は「皆」を入れて文章を作成したが、「皆」がある場合と、ない場合とは、文章の印象はどのように変わるか。グループで話し合い、発表してみましょう。

「人皆有不忍人之心」⇔「人有不忍人之心」

○なぜ孟子は「皆」を入れて文章を作ったか。レトリックの面から考え、孟子のねらいをグループで話し合い、発表してみましょう。

#### ③「矣」に表現される「信念」のレトリック

—有不忍人之政矣—

ここで孟子は「人皆有不忍人之心」を基に、堯・舜・禹などの聖王による「不忍人之政」が過去に行われ、実証済みだと主張する。その口調（文章のリズム）を孟子は「矣」を用いて表現する（写しとる）。この「矣」という言葉について「自らを信ずるところを特に強く表示したり、また主張する必要がある場合の口気を写すものであり、その確信の仕方は直覚的であり、感情的であり強くかつ鋭い。国語では『～であることはいうまでもない』『～にちがいない』というような気持ちを含めて訳せば、ほぼその意に近い。」（『漢文訓読の基礎』中澤希男・瀧谷玲子 教育出版）とあるように、孟子は「主張」（＝結論）に「信念」を持ち、「矣」を用いて、それを伝えようとしたのである。この「信念」よりの熱意と自信に満ちた言い切りの口調（文章のリズム）になっているのである。「信念」や自信に裏付けされた言葉は、迫真力を持ち、弟子（聞き手・読み手）はその主張の中に引き込まれてしまう魅力を持つのである（注1参照）。ここは、①②のレトリックとともに熱意と自信に満ちた迫真の口調（文章のリズム）で「主張」（＝結論）を述べているのである。

「矣」の使用は、この箇所一回だけだが、その

漢字の持つ意味や用法に熟達することは、レトリックの面から本文を解釈する場合、必要になる知識である。

#### 発問の構想

○「矣」の意味・用法を辞書やネットで調べてみましょう。

○「矣」がある場合とない場合では、孟子の口調（文章のリズム）はどのように変わるか。グループで話し合い、発表してみましょう。

○「矣」によって孟子は、どのような口調（文章のリズム）を表現しよう（写そう）としたか。グループで話し合い、発表してみましょう。

○なぜ孟子は「矣」を入れて文章を作ったか。レトリックの面から考え、孟子のねらいをグループで話し合い、発表してみましょう。

#### ④「繰り返し」のレトリック

—有不忍人之心・不忍人之政—

孟子は弟子（聞き手・読み手）にとって初めて聞く言葉を繰り返し用いる。その単純な「繰り返し」のレトリックの効用は、その言葉に対する違和感・抵抗感という拒絶反応を除去することにある。これを孟子は強く意識し、「不忍人之心・不忍人之政」の繰り返しを用いたのである。前半だけでその回数は六回。頻出というレベルである。繰り返しについては、橋本堯は、「ここに『孟子』は『人に忍びざる』ということばをくりかえし用いた」（『漢文・読み方と鑑賞』日中出版）とするによった。では、なぜ、拒絶反応を除去しようとしたか。「不忍人之心」「不忍人之政」という言葉が、孟子にとって大切な言葉、つまり、「主張」（＝結論）だからである。「主張」（＝結論）の言葉だから、弟子（聞き手・読み手）の心にスムーズに受け入れてもらいたかったし、理解してもらいたかったからと考えられる。

#### 発問の構想

○「繰り返し」用いられている言葉を本文から見つけ発表してみましょう。

○「繰り返されている」言葉に対する印象が、最初と最後ではどのように変わったか。その変化をノートにまとめてみましょう。その際、変化した理由もまとめてみましょう。

○言葉を「繰り返し」用いるレトリックの効用をグループで調べてみましょう。その際、ネットの場合、その情報が正しいかどうか、お互い確認し合いながら調査してみましょう。

○なぜ孟子は「不忍人之心」を「繰り返し」たのか。その理由をレトリックの面から考え、ノートにまとめてみましょう。

#### ⑤「共感」を得るためのレトリック

—所以謂人皆有不忍人之心者、今人乍見孺子將入於井、皆有惻隱之心—

ここは、「不忍人之政」(仁政)を行うための前提となる「不忍人之心」が人間一般に先天的に備わっていることを例証する箇所である。孟子はここでこの例証によって、弟子(聞き手・読み手)が自己の「主張」(=結論)に「共感」することを期待するのである。

まず、最初に孟子は、子供が井戸に落ちそうになるのを見たら、その瞬間に誰もが「ハッと驚き、かわいそうだ」と思うに違いないという。当時の中国の人にとって、非常に身近で現実味のある具体例を持ち出し証明するのである。中国の井戸はたいいてい、高さ二十～三十センチメートルほどの石の枠で囲まれているだけだから、幼児の落下事故は絶えなかった。この時は、例外なく誰でも瞬間的に純粹で素朴な心の動きが生じる。これを絶対的根拠として、孟子は誰にでも「不忍人之心」が備わっているとする。この「主張」(=結論)についての証明の論理は、当時でも現在でも、多くの人になお強い説得力を持ち、広い「共感」をかちとることのできるものだと筆者は考える。これは、孟子の得意とするレトリックで、弟子(聞き手・読み手)が納得しやすい「共感」しやすい身近で具体的で現実感のある例を用いて「説得」するもので、人は結局、身近で人間的なものに惹かれやすいという側面を最大限利用しているのである。これは『孟子』の随所に見られる。

さらにいうなら、この「孺子入井」(幼児落下)の用例は、孟子が人間の道徳的能力の芽生え・道徳的实践を成り立たせる能力を、このような瞬間的に湧き上がる素朴で私的な感情的レベルの潜在的能力にあると捉えていることも表している。つ

まり、孔子において具体的な人間関係の中にのみ捉えた「仁」を、孟子は「仁」を行うことを可能にする根拠を問題にしているのである。ここに、孟子の道徳説の大きな特色があるといえる。

さて、この箇所の孟子の口調(文章のリズム)はどのようなものか。「孺子入井」(幼児落下)の用例以前は勢いのある言い切り口調(③「矣」に表現される「信念」のレトリック参照)が、ここから変わって静かで柔らかくゆったりした口調(文章のリズム)になっていると考えられる(注2参照)。それは、次のような理由による。①～④のレトリックによって弟子(聞き手・読み手)は、孟子の「主張」(=結論)や例証を受け入れやすくなっている。孟子は、これによって、次の段階の「説得」へと移るのである。それは、「不忍人之心」は誰にでもあるということを弟子(聞き手・読み手)の人間的感情に訴え、それを納得させ、「主張」(=結論)への「共感」へと導くことに主眼を置いた「説得」ということである。だから当然、その口調(文章のリズム)はゆったりと諄々としたものになる。言うまでもないが、思想・主張・考えというのは相手の「共感」が伴わなければ、それは単なる独善で終わってしまう。社会的に影響を与えることはできないし普遍性を持ち得ることもない。その意味で「主張」(=結論)への「共感」を得ることは思想家にとって大事なことなのである。孟子はこの「共感」を基に、弟子(聞き手・読み手)を「発見」(新しい認識・新しい概念)の世界(孟子の考える真実の世界)に導いていこうとするのである。ここを渡辺卓も「たしかに孟子のいうとおり、人間には打算を超越したこういう純粹な人間愛が先天的にだれにでもある。お互いは社会的な連帯感のなかで日々の経験からそれを確かめることができる。だから現代でも人間疎外の進んでいない場所ではなお説得力を持ち、広い共感をかちえることのできる論理のように思われる。」(中国古典新書『孟子』明德出版)と指摘する。的を射ている。

#### 発問の構想

○「孺子入井」(幼児落下)の小話は、どのような印象を持つか。グループで話し合い、そのグ



ループの中で自由に話してみましょう。

○あなたは「孺子入井」という小話に「共感」しますか、「共感」しませんか。その理由もノートにまとめ、発表してみましょう。

○「孺子入井」の小話を入れた文章とない文章では、その説得力はどのように違うか。自分の考えをノートにまとめてみましょう。かならず、そのように思う根拠を書くこと。その後、グループ内でそれぞれの考えと根拠を発表し、その考えと根拠に対するコメントを他の生徒からいただきます。

○孟子は「孺子入井」の小話を入れることによって、どのような「説得」の効果をねらったか。グループで話し合い、発表してみましょう。

○孟子は「孺子入井」（幼児落下）の小話をいれた。孟子のねらいは何か。レトリックの面から考え、ノートにまとめてみましょう。

⑥「也」に表現される「説得」調のレトリック  
—非所以内交於孺子之父母也。非所以要譽於郷党朋友也。非惡其声而然也。由是觀之、無惻隱之心、非人也。無羞惡之心、非人也。無辭讓之心、非人也。無是非之心、非人也。惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、礼之端也。是非之心、智之端也。人之有是四端也、猶其有四体也。—

この『孟子』教材中、「也」は繰り返し十三回使用されている。この「文末に置かれて『也』は、話し手がある事実をおだやかに断定・説明しようとする気持ちを表しているのであって、語本来が『……である』という意味をもっているのではない。」（『研究資料漢文学第十巻 語法・句法・漢字・漢語』国金海二 明治書院）とあるように、これによるなら、やはり孟子が諄々と穏やかな「説得」口調で語っていることを「也」によって孟子は写しとっていると考えられる。これらより、ここも⑤と同じように「説得」口調を用いて「共感」を得るために語っていると読み解けるのである。

#### 発問の構想

○「也」の意味・用法を辞書やネットで調べてみましょう。

○「也」がある場合とない場合では、孟子の口調（文章のリズム）はどのように変わるか。グループでは話し合い、発表してみましょう。

○「也」を用いて『孟子』は、どのような口調（文章のリズム）を表現しよう（写しとろう）としたか。グループで話し合い、発表してみましょう。

○孟子は、「也」という言葉を用いて文章を作った。孟子のねらいは何か。レトリックの面から考え、グループで話し合い、発表してみましょう。

⑦「由是觀之」に込められた「拡充」のレトリック  
—由是觀之、無惻隱之心、非人也。—

「由是觀之」は、一般的には推論形（ある事柄から推察してか考えを述べるもの）と呼ばれ、「このことから考えてみるに」の意とする『漢文訓読の基礎』（中澤希男・澁谷玲子 教育出版）。もう少しうなら前文所述のその原因を後文所述その結果との即応関係を特に示そうとしたものだということになる。

以上の視点より、孟子が用いた「由是觀之」の意味・用法について詳述する。

孟子は、「孺子入井」の時、ハッと心が動くという事実を述べ、その理由を考えると（由是觀之）、それは人には惻隱の心（「不忍之心」）があるからだと根拠付ける。しかし、ここで問題なのは、「惻隱之心」には根拠づけ・例証・論証はあるが、他の「羞惡之心・辭讓之心・是非之心」にはそれがない。論理的には不完全な文章といわなければならないのである。しかし、弟子（聞き手・読み手）には何らそれを感じさせない文章となっている。なぜか。それについて、竹添光鴻は『孟子論文・卷之二』の注で、「由是觀之一句、開下半篇文字。蓋前半只說不忍之心、將此一句推開、便由惻隱說到羞惡辭讓是非。又說到仁義礼智、俱從此一句發出。文章有用一句展拓者皆此法。前半明其皆有。故說心。後半欲其拡充。故說端。」（是に由りて之を觀ればの一句は、下半篇を開くの文字なり。蓋し前半只忍びざるの心を説き、將に此の一句にて推開し、便ち惻隱に由りて羞惡辭讓是非を説き到る。又仁義礼智に説き到るも、俱に此の一句従り發出す。

文章に一句を用いて展拓する有るは皆此の法なり。前半其れ皆有るを明らかにするなり。故に心を説くなり。後半其れ拡充せんと欲するなり。故に端を説くなり。)とする。つまり、孟子は「孺子入井」による根拠づけ・例証によって、徳の根本の「不忍人之心」があることが証明できたので、今度はそれを基に推し広げて他の「羞惡之心・辞讓之心・是非之心」も、人にあると説き、さらにそれを推し広げて「仁義礼智」の徳まで「拡充」する。この「拡充」の論理(論法)を「由是觀之」の一句が支えているというのである。確かに、この言葉によって不完全な論理・論調の文章が、「拡充」の論法により弟子(聞き手・読み手)には自然な論調・口調になり、結論へと導かれるのである。「由是觀之」について、竹添光鴻が「推開」(「推」は推量するの意。「開」は広げる・引き伸ばすの意)と注したのは慧眼といえる。

ここで、孟子はなぜ「拡充」のレトリックを用いたのか。このレトリックによって、孟子は、「羞惡之心・辞讓之心・是非之心」の根拠・論証を省略する。煩雑な論証を思い切って省いたのは、これによって「説得」の文章のリズムを大事にしたからである。つまり、「主張」(=結論)についての「説得」の文章のリズムが、だらけた感じのないようにしたのである。当然、「説得」の口調も、だらけた感じのないものとなる。以上より、「⑥『也』」に表現される『説得』調のレトリックの「孟子が諄々と穏やかな口調(文章のリズム)で語っていることを孟子は表現している(写しとっている)」と考えられる。」を前提に読み解く必要がある。そうすると、諄々としたものの中に引き締まった力強い、だらけた感じのない「説得」口調(文章のリズム)となっているのである。

#### 発問の構想

- 「由是觀之」の意味・用法を辞書やネットで調べてみましょう。
- 「由是觀之」がある場合とない場合では、『孟子』の文章のリズムはどのように変わるか。グループでは話し合い、発表してみましょう。
- 「由是觀之」を各文に入れて、文意が明晰になるようにした場合と、本文のようにした場合を

比べ、どのような違いが生じるか。グループで話し合ってみましょう。

「由是觀之」を入れた場合

由是觀之、無惻隱之心、非人也。

由是觀之、無羞惡之心、非人也。

由是觀之、無辞讓之心、非人也。

由是觀之、無是非之心、非人也。

「由是觀之」を入れなかった場合(本文)

由是觀之、無惻隱之心、非人也。

無羞惡之心、非人也。

無辞讓之心、非人也。

無是非之心、非人也。

- また、どうして孟子は、「由是觀之」を本文のように一か所しか入れなかったのか。孟子のねらいについてもグループで話し合い、発表してみましょう。

#### ⑧類句法(類叙法)を用いたレトリック

一無惻隱之心、非人。無羞惡之心、非人也。無辞讓之心、非人也。無是非之心、非人也。——  
一惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辞讓之心、礼之端也。是非之心、智之端也。——

ここで孟子は、①「無惻隱之心、非人。無羞惡之心、非人也。無辞讓之心、非人也。無是非之心、非人也。」の四句と、②「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辞讓之心、礼之端也。是非之心、智之端也。」の四句からなる類句法を用いている(注3)。類句法とは、多くの言葉を用いながらも冗漫にならず文章の調子を高めながら、一つのある造形を念入りに表現するレトリックである。孟子はここで類句法を用いて、「性善」(=「不忍人之心」)を丁寧に造形させようとしたのである(注4)。

その口調(文章リズム)については、教材本文にあるように、「也」が頻出しているので、その口調(文章のリズム)は、「説得」調となる。(⑥「也」に表現される「説得」調のレトリック参照。)

#### 発問の構想

- 類句法の意味・用法を濡所やネットで調べなさい。
- 類句法は何かを造形させるときに用いる言葉



が、孟子は何を造形させようとしたか。発表してみましよう。

○孟子が類句法を用いて表現した理由をグループ話し合い、発表してみましよう。

### 3 具体的な教材Ⅱ

#### (1) 二柄説—『韓非子』思想教材本文

##### 【本文】

明主之所導制其臣者、二柄而已矣。二柄者刑德也。何謂刑德。曰、「殺戮之謂刑、慶賞之謂德。」為人臣者、畏誅罰而利慶賞。故人主自用其刑德、則群臣畏其威而歸其利矣。故世之姦臣則不然。所惡則能得之其主而罪之、所愛則能得之其主而賞之。今人主非使賞罰之威利出於己也、聽其臣而行其賞罰、則一國之人、皆畏其臣而易其君、歸其臣而去其君矣。此人主失刑德之患也。夫虎之所以能服狗者、爪牙也。使虎釋其爪牙而使狗用之、則虎反服於狗矣。人主者、以刑德制臣者也。今君人者、釋其刑德而使臣用之、則君反制於臣矣。故田常上請爵祿而行之群臣、下大斗斛而施於百姓。此簡公失德而田常用之也。故簡公見弑。子罕謂宋君曰「夫慶賞賜予者、民之所喜也。君自行之。殺戮刑罰者、民之所惡也。臣請當之。」於是宋君失刑而子罕用之。故宋君見劫。故今世為人臣者、兼刑德而用之、則是世主之危、甚於簡公・宋君也。故劫殺擁蔽之主、并失刑德而使臣用之、而不危亡者、則未嘗有也。(『新釈漢文大系 韓非子』竹内照夫・明治書院による。旧字を新字に訂正。筆者

による。)

##### 【書き下し文】

明王の其の臣を導制する所の者は、二柄のみ。二柄とは刑徳なり。何をか刑徳と謂ふ。曰はく、「殺戮之を刑と謂ひ、慶賞之を徳と謂ふ。」と。人臣為る者は、誅罰を畏れて慶賞を利とす。故に人主自ら其の刑徳を用ゐなば、則ち群臣其の威を畏れて其の利に帰す。故に世の姦臣は則ち然らしめず。惡む所は則ち能く之を其の主に得て之を罪し、愛する所は則ち能く之を其の主に得て之を賞す。今人主賞罰の威利をして己に出でしむるに非ず、其の臣に聽きて其の賞罰を行はば、則ち一國の人、皆其の臣を畏れて其の君を易り、其の臣に歸して其の君を去る。此れ人主刑徳を失ふの患なり。夫れ虎の能く狗を服する所以の者は、爪牙なり。虎をして其の爪牙を釈てしめて狗をして之を用ゐしめば、則ち虎反つて狗に服せられん。人主なる者は、刑徳を以て臣を制する者なり。今人に君たる者、其の刑徳を釈てて臣をして之を用ゐしめば、則ち君反つて臣に制せられん。故に田常は上は爵祿を請ひて之を群臣に行ひ、下は斗斛を大にして百姓に施せり。此れ簡公徳を失ひて田常之を用ゐるなり。故に簡公弑せらる。子罕宋君に謂ひて曰はく、「夫れ慶賞賜予は、民の喜ぶ所なり。君自ら之を行へ。殺戮刑罰は、民の惡む所なり。臣請ふ之に当たらん。」と。是に於いて宋君刑を失ひて子罕之を用ゐる。故に宋君劫さる。故に今の人臣為る者、刑徳を兼ねて之を用ゐれば、則ち是れ世主の危ふきこと、簡公・宋君よりも甚だしきなり。故に劫殺擁蔽の主は、刑徳を并せ失ひ臣をして之を用ゐしめ、而も危亡せざる者は、則ち未だ嘗て有らざるなり。

#### (2) 『韓非子』(二柄説)教材のレトリックを読み解く際の基本的な視点

「3 具体的な教材Ⅰ(2)『孟子』(性善説)教材のレトリックを読み解く際の基本的な視点」で述べたように、「思想家は自己の主張を効果的に分かりやすく伝え、同時にそれに対する『同意・共感』を得ようと、その会話に文章に多彩なレトリックを用いて豊かな表現を工夫し相手を『説得』する。」とあることより、ここでも多くのレ

トリックが用いられた思想教材『韓非子』（二柄説）を読み解きの対象とする。

そこで、次の視点から韓非のレトリックの読み解きをする。

ア、韓非の自己の「主張」（＝結論）の「説得」

対象は、「現実の君主」（読み手であるその時代の君主）であるということ。

イ、この文章に用いられた多彩なレトリックは、「現実の君主」に自己の「主張」（＝結論）を「説得」しようとする韓非の意識が表出した結果であるということ。

ウ、韓非は、生来、吃音であったため、弁舌は不得手であったが、文章には優れた力を以ており、巧妙なレトリックを用い、自己の「主張」（＝結論）を「説得」しているということ。（注5）

なお、ここでのレトリックの読み解きについては、以前、『2009年第49号 新しい漢字漢文教育』（全国漢文教育学会）の「『韓非子』二柄篇二柄説教材の『修辞』を読み解く—『説得』という視点の教材分析」で論じたが、「なぜ、レトリックを用いたのか」「どのような目的のためにレトリックを用いたのか」という問いに答えていなかった。そこで本稿は、その点に十分に答えられるようレトリックを読み解いた。その視点は、「主張」（＝結論）のよりよい「説得」のためにレトリックがあるということである。

これより、新しい視点に基づいたレトリックの読み解きの論文になっていることをここに記す。

### （3）『韓非子』の魅力—冷徹で分析的な文章と論理、巧妙で多彩なレトリック—

金谷治は、次のように（傍線による指摘は筆者による）『韓非子』の魅力を解説する。これをもとに、教材研究も授業実践も組み立てるものとする。「『韓非子』の文章は歯切れがよく、その論理も明快である。思想内容もドライで新しく、現代人にとっても理解しやすく興味深いものが多いはずだ」（『韓非子・一冊』岩波書店）と。この指摘から、その文章の読み解きは、理路整然としていることを前提に、そこにレトリックの視点を加味して教材研究することが大事になる。それは『韓非子』には多くの寓話や、巧妙なレトリックが用い

られ、極めて「説得」的な文章だからである。

さらに、「韓非子の議論には、タテマエ論や感傷が一切なく、冷徹な人間観察が貫かれている。『妻や子を信じるな』（君主である自分が死ねば、最も利益を得るのは彼らなのだ）『臣下は常に君主の目をごまかそうとする』（両者の利益は相反するのだ）、『人民は権威に服するものであって、義に動かされるものではない』といった冷めた人間観は『韓非子』全体を覆うものである。たしかに政治の世界、権力という磁場においては、おそらくそれが絶対に必要であろう。しかしそれ以外の世界にまで無限にそれを広げていけば、人間不信のシニズムに陥らざるを得ない」（傍線による指摘は筆者による）という視点（『精選古典』明治書院指導書・丸山松幸・筆者）も据えながら、レトリックを読み解く必要がある。

また、加地伸行も『『韓非子』がしっかりと或る確信、或る人間観、或る真実を持っていて、そこからすべて冷徹に見通すという体系的な態度であるからである。その確信、人間観、真実は、全編、微動だにしない。ゆるぎない自信と強烈さに圧倒される。」という。これは、まさに自己の「主張」（＝結論）にすべてが統合していくということの意味するので、ここで、読み解くレトリックは韓非の「主張」（＝結論）をよりよく「説得」する（伝える）ためのものである。

### （4）『韓非子』教材のレトリックの読み解き

ここでは、韓非の「主張」に関連するレトリックの読み解きを中心に論述する。

#### ①「興味・関心」のレトリック—冒頭文—

—明主之所導制其臣者、二柄而已矣。

読み手は、その文章のどの箇所であれ、興味・関心のある内容が書かれていれば積極的に読み、その主張を理解しようとする。逆に、書かれていなければそのようにはしない。この単純な事実を、レトリックを、熟知していた韓非は、開口一番、「明主之所導制其臣者、」と「君主の興味・関心」から書き出すのである。それによって、「君主」の心を掴み、その文章に引き付けられるのである。この言葉も、韓非がこれから述べる自己の「主張」（＝結論）の理解の前提になる言葉である

ことも見逃してはならない。つまりこれも、「主張」(＝結論)と関連する言葉といえよう。韓非は次に、「二柄」とする。これは、「主張」(＝結論)を「隠喩」で表現したものである。ここでこのレトリックを用いたのは、「心の状態をある一定の方向に誘導する」という「隠喩」の効用を考えたからである。臣下操縦は難事ではなく、実は、君権「刑徳」だけを用いればよいという「新しい思考」(君主にとって新しい思考)の有様(「主張」)を「隠喩」の言葉によって、分かりやすく造形したのだ。同時に、「君主の思考」も「たった二つの事だけでよいなら、私にも実行できるかもしれない。」という、積極的な方向に導き、「主張」(＝結論)を受け入れやすくしているのである。

#### 授業の構想

- 「君主」は、どのようなことに関心を示すと考えますか。グループで話し合ってみましょう。また、そのように考えた理由も話し合みましょう。
- 君たちが「君主」だったら、どのようなことに興味を持ちますか。グループで話し合ってみましょう。また、その理由も発表してみましょう。
- あなたが「君主」なら、どのような臣下操縦法を思いつきますか。それをノートにまとめ、発表してみましょう。
- あなたが「君主」なら、「刑」と「徳」と、どちらに重きを置きますか。グループで話し合みましょう。また、そのように判断した理由も発表してみましょう。
- 「君主の興味・関心」から書き出す(語り出す)レトリックの効用をグループで調べてみよう。その際、ネットの場合、その情報が正しいかどうか、お互い確認し合いながら調査してみましょう。
- ここは「主張」を「隠喩」で表現しているが、この「隠喩」のレトリックには、どのような効用があるかをグループで話し合い、発表してみましょう。
- 冒頭文に「興味・関心」「興味・関心」のレトリックを用いる効用をグループで調べてみよう。

う。その際、ネットの場合、その情報が正しいかどうか、お互い確認し合いながら調査してみましょう。

#### ②「繰り返し」のレトリック

—刑徳・慶賞・刑・徳・賞—

韓非は、「主張」に関連する重要単語である「刑徳」・「慶賞」・「刑」・「徳」・「賞」(教材全文数25文中14＝56%に出現)を繰り返し用いて文章を組み立てている。これを今鷹真は「同一語の頻用。諸子の文章は、自己の思想・政策を主張するものである以上、当然、その主張を徹底させるために、手をかえ品をかえ、繰り返し述べる。」(『中国詩文選5諸子百家』筑摩書房)というように重要単語を繰り返し提示し、その印象を強めることによって、その「主張」(の理解＝結論の理解)を徹底させようとしたと考えられる。つまり、韓非は自己の「主張」(＝結論)を「説得」する上で、「刑徳」の十分な知識や理解が大事になると考えたから、繰り返し用いて印象付けたと考えられる。韓非は「説得」のレトリックの効用を十分に理解していたのである。

ちなみに、狩野尚禎は「賞」と「罰」の関係について「法家の立場からすると韓非子の議論は、賞罰の二柄とはいっても、話の中心はどうしても賞より罰のほうにいつてしまう。」(『韓非子』の知恵 講談社現代新書)と指摘するが、正鵠を得ている。

#### 授業の構想

- 繰り返し用いられている言葉を本文から見つけ、発表してみましょう。
- 言葉を繰り返し用いるレトリックの効用をグループで調べてみましょう。その際、ネットの場合、その情報が正しいかどうか、お互い確認し合いながら調査してみましょう。
- なぜ韓非は「刑徳・慶賞・刑・徳・賞」を繰り返したのか。その理由をレトリックの面から考え、ノートにまとめてみましょう。
- あなたが「君主」なら、「刑」「賞」のどちらに重きを置きますか。グループで、話し合みましょう。また、そのように考えた理由も発表してみましょう。



### ③「警告文」のレトリック

—故今世為人臣者、兼刑德而用之、則是世主之危甚於簡公・宋君也。故劫殺擁蔽之主、非失刑德而使臣用之而不危亡者、則未嘗有也。—

韓非は、「警告文」によって文章を締め括る。このレトリックには、これから起こり得る最悪の結果を告げ、読み手の心を揺さぶること（威し）によって、その読み手は、君主の心に恐怖心や不安感をなどの不安定な感情を生み出し自己の「主張」（＝結論）の「説得」を補助するばかりか、高める働きがあるのである。つまり、「刑德」を失った簡公や宋君などの例を述べて恐怖心を掻き立てることによって、その解決策としての「主張」（＝結論）に「共感」させようとしたのである。これについて、『レトリック探求法』（柳澤浩哉・中村敦雄・香西秀信 朝倉書店）にも、「説得」には、感情を利用することが有効な方法であるとし、キケロ（片山英男訳『キケロ—選集第六卷弁論術の分析』岩波書店）も、アリストテレス（戸塚七郎訳『弁論術』岩波文庫）も結びに感情の利用を提言している。

#### 発問の構想

- 最後に「警告文」で終わるレトリックの効用をグループで調べてみましょう。その際、ネットの場合、その情報が正しいかどうか、お互い確認し合いながら調査してみましょう。
- 韓非が最後に「警告文」を用いた理由をレトリックの面から考え、ノートにまとめてみましょう。
- 最後に「警告文」を用いることによって何の「説得」を補助するのか。グループで話し合い、発表してみましょう。
- 最後に「警告文」を用いることによって何に「共感」させようとしたのか。グループで話し合い、発表してみましょう。

### ④三段落構成の文章

この文章の構成を、「君主」に対する自己の「主張」（＝結論）の「説得」という視点から、どのような文章構成を用いているかを吟味してみると、双括型（「主張」結論—本論—「主張」結論）の三部構成になっていることが分かる。この「双括

型」の文章は、読み手を「説得」するための文型で、韓非の「主張」（＝結論）が一段落目と三段落目で繰り返し述べることによって強調され、「主張」（＝結論）や要旨がとらえやすくなっている。「主張」（＝結論）の分かりやすい伝達を考えた構成なのである。

もう少し詳述するなら、次のようになる。

ア、第一段落（「主張」（＝結論）の提示）

本文「明主之所導制其臣者、二柄而已矣。二柄者刑德也。何謂刑德曰殺戮之謂刑、慶賞之謂德。」

「主張」（「君主」が臣下操縦するには、「刑德」が必要だという結論）を提示し、その「主張」の「説得」を開始する。

イ、第二段落（「主張」の説得）

本文「為人臣者畏誅罰而利慶賞、故人主自用其刑德、則群臣畏其威而歸其利矣。（……中略……）

於是宋君失刑、而子罕用之。故宋君見劫。」

「刑德」の活用と保持の重要性を「繰り返し」のレトリックなどを用いながら「主張」（＝結論）を「説得」する。

ウ、第三段落（「主張」＝結論の締め括り）

本文「故今世為人臣者兼刑德而用之、則是世主之危甚於簡公、宋君也。故劫殺擁蔽之主、非失刑德而使臣用之而不危亡者、則未嘗有也。」

「君主」に警告を発して臣下操縦には「刑德」が必要であるという「主張」（＝結論）をもって締め括る。「君主」の心を揺さぶりながら「主張」の「説得」（＝結論）を終了する。

つまり、韓非は双括型の三部構成を用いて、その「主張」（臣下を意のままに操縦するには「刑德」という君権の保持と活用が重要であるということ）を「説得」しようとしていることが分かる。三部構成は、「主張」（＝結論）の伝達が理解されやすい文章構成だと、韓非は理解していたのである。

#### 発問の構想

- 教材本文は、何部構成（何段落構成）になっているかを考え、発表してみましょう。
- 教材本文は、三部構成（三段落構成）になっています。各段落の内容をノートにまとめ、発表してみましょう。

- 教材本文の韓非の「主張」(＝結論)を分かりやすく説明してみましょう。
- 韓非の「主張」(＝結論)は三部構成(三段落構成)のどの部(どの段落)にあるかを指摘してみましょう。
- 韓非は自己の「主張」(＝結論)を分かりやすく表現しているか、いないか。そのように判断した理由をノートにまとめ、発表してみましょう。

#### 4 終わりに

以上より、孟子と韓非が用いた多彩なレトリックを、読み解いた。その視点は、それぞれの思想家が自己の「主張」(＝結論)をよりよく伝えるためにレトリックを用いたということである。それを本稿では、「説得」のレトリックとした。この拙論が多くの現場にいる先生方の「教材研究」

とその結果の「発問」の構想に少しで寄与できれば幸いである。ご叱正を請いたい。

#### 注

注1 「そして『ヒットラーの力の秘密は、運動に対して狂信的な信念のあることだ。…』(中略)その行動は、たえず矛盾していても、語ることは、迫真力を持っている。(中略)「自信」は、「熱意」と「反復」とを生む。そして、多くの人を説得しやすい」(安本美典『説得の文章技術』講談社現代新書)による。

注2 「頓挫」(『十三経解詁・第八十九』孟子公孫丑の部)による。

注3 「下差惡等情、用類叙法」(簡野道明補註『補註孟子集註』明治書院)による。

注4 「真理を無視し、言語の力をたのみ、言語の力をかりて聴衆に阿諛追従し、聴衆の同意を獲得しさえすれば満足するレトリックは、仮象の技術にすぎない」(ベレルマン・三輪正『説得の論理学—新しいレトリック—』理想社)による。

注5 「『精選古典』指導書 拙著 明治書院」の「その文章は理路整然としており、多くの寓話を用い、巧妙な比喩をめぐらし、極めて説得的である。」による。